



★★★★

ランド・オブ・バッド (LAND OF BAD)

2025年／アメリカ映画

配給：AMG エンタテインメント／113分

2025（令和7）年8月6日鑑賞

オンライン試写

Data

2025-71

監督・脚本：ウィリアム・ユーバン
ク
出演：ラッセル・クロウ／リアム・
ヘムズワース／ルーク・ヘム
ズワース／マイロ・ヴィンテ
ィミリア／リッキー・ウイッ
トル

みどころ

「ランド・オブ・バッド」を直訳すれば、「最悪の地」。そこ、すなわち反政府ゲリラが支配する南アジアのスールー海上の島は、まさに死と隣り合わせの最悪の地だ。同島での人質救出作戦に挑むのは、①デルタフォース、②JTAC（統合末端攻撃統制官）、③MQ-9 リッパーだが、本作では、第1にそれぞれの任務内容の確認が不可欠だ。

そして第2に、今やでっぷり太ってしまったハリウッド俳優・ラッセル・クロウがアクションを封印し、地上誘導ステーション内の椅子に座り、MQ-9 リッパーを見事に遠隔操作する姿を堪能したい。

家庭的にも軍歴的にも「大いに問題あり」の彼だが、コト任務の遂行となれば、その技術は・・・？本作がわかれば、ウクライナ戦争もよくわかる。「TVゲームを楽しむノリで」とまでは言わないが、それに近いノリで“アメリカ（軍）の正義の戦い”を楽しみつつ、しっかり現実と対比したい。

————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

■□凡百のミリタリーアクションとは一線を画した骨太の力作！■□■

2025年8月6日にオンライン試写で観たのは、チラシに「そこは、死と隣り合わせの『最悪の地』“空の眼”は孤立無援のチームを救えるか——。想像を絶する脱出作戦が始まる！」「想像を絶する2日間——無人機とデルタフォースの史上最悪の脱出作戦」の見出しが躍る本作だ。8月15日から公開される本作のタイトル『ランド・オブ・バッド』は、まさに死と隣り合わせの「最悪の地」を表現したものだ。

人類は、第1次世界大戦、第2次世界大戦を含み、戦争の度に「進歩」を繰り返してきた。そのことは2022年2月7日に始まったウクライナ戦争におけるミサイルとドローンの活用を見てもよくわかるが、さて本作は？

ラッセル・クロウは、初期の『インサイダー』(99年) (『シネマ1』46頁)、『ビューティフル・マインド』(01年) (『シネマ2』40頁) からアカデミー賞主演男優賞を受賞した『グラディエーター』(00年) や『アメリカン・ギャングスター』(07年) (『シネマ18』14頁)、『ノア 約束の舟』(14年) (『シネマ33』196頁) 等々まで、あらゆる役を完璧にこなす素晴らしいハリウッド俳優。しかし、誰でも年を取り身体に肉がついてくると、動き (アクション) が鈍くなるのは仕方がない。そこで、本作で彼に用意されたのは (?)、MQ-9 リーパーのベテラン操縦官 (空軍大尉) のエディ・グリムフリム役だ。リーパーと呼ばれている、本作でラッセル・クロウ演じるそんな男のキャラは実に興味深いうえ、今のが彼の体型の彼にピッタリだ。そんな本作が、「凡百のミリタリーアクションとは一線を画した骨太の力作だ。世界のどこかで同じ戦争は今も起きている」とまで“売り”を強調されると、こりや必見!

■■3つの軍事用語 (概念) をしっかり理解せよ! ■■

本作を楽しむためには、まず平和で安全な国に住んでいる日本人には馴染みのない①デルタフォース、②JTAC (統合末端攻撃統制官)、③MQ-9 リーパー、という3つの軍事用語 (概念) をしっかり理解することが不可欠だ。それらはチラシで、次のとおり説明されている。

①デルタフォース

対テロ・人質救出・偵察などの極秘任務を行うアメリカ陸軍の精鋭特殊部隊であり、CIA や他部隊と連携して世界中で活躍している。厳しい選抜と訓練を経た精鋭で、グリーンベレーやネイビーシールズと並ぶ米軍最強部隊とされる。

②JTAC (統合末端攻撃統制官)

地上部隊と航空機を連携させて精密な航空支援を指示する専門兵士であり、誤爆を防ぎつつ作戦の成功と味方の安全を支える現代戦の重要な存在である。

③MQ-9 リーパー

米国製の無人攻撃機で、長時間滞空と高性能センサーを備え、ミサイルや誘導爆弾を多数搭載可能。無人機中で最高の攻撃力を持つ。

これは最低限の知識だが、Wikipedia を調べるとすぐに詳細な情報にアクセスできるから、より詳しく理解したい人にはそれをお勧めしたい。

■■主人公たち各自の任務をしっかり理解せよ! ■■

次に、本作では主人公たち各自の任務をしっかり理解することが不可欠だ。まず、精鋭ぞろいのデルタフォースの腕利き隊員として、反政府ゲリラが支配する南アジアのスルー海の島に潜入り、誘拐された CIA エージェントの救出任務に挑むのは次の3人だ。

① デルタフォース軍曹・エイベル (ルーク・ヘムズワース)

② デルタフォース曹長・シュガー (マイロ・ヴィンティミリア)

③ デルタフォース軍曹・ビショップ (リッキー・ウイットル)

次にこの 3 人の任務遂行のために不可欠な航空支援の連絡係（オペレーター）として参加したのが、統合末端攻撃統制官（JTAC）の若きギニー軍曹（リアム・ヘムズワース）だ。MQ-9 リーパーの“リーパー”は「刈り取るもの」や「死神」の意味だが、同機内に人間は登場せず、有人の地上誘導ステーションで遠隔操縦される。そして地上誘導ステーションの操縦員はパイロットとセンサー員が 1 人ずつで構成されている。しかして、本作後半からは空軍大尉のエディ・グリム（ラッセル・クロウ）が MQ-9 リーパーの操縦員として重要な任務を担うことになるので、それに注目！またセンサー担当の黒人の女性兵士にも注目！

■□■救出作戦は失敗！デルタフォース隊員全滅の危機が！■□■

ベトナム戦争をテーマにしたオリバー・ストーン監督の『プラトーン』（86 年）は名作中の名作だが、同じころに観た『エヌミー・ライン』（01 年）（『シネマ 1』71 頁）は、日本人には馴染のないバルカン半島のボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争におけるアメリカからみたスーパーヒーローアクションの戦争映画だった。同作では、取り残された米兵を救出するために全力を尽くしたアメリカ（軍）の姿を実感することができた。

あの当時のアメリカは、遠い異国の周辺海域へ空母を派遣し、優秀なパイロットが優秀な艦載機を発進させて、地域紛争、民族紛争に介入し、より良き解決を目指していた。しかし、それから約 25 年後の今、南アジアの孤島で誘拐された CIA エージェントを救出するための作戦は如何に？

今や地上でも監視カメラが充満し、道路上における交通事故は、路上に設置された監視カメラと車に装着された監視カメラで一部始終が撮影されているのが通常だが、それは本作戦でも同じ。機上から島に降り立った 3 人のデルタフォース隊員とギニー軍曹の姿は、長時間滞空が可能な無人攻撃機 MQ-9 の高性能センサー（カメラ）によって、そのすべてが映し出され、（リーパーの）エディが座る椅子の前の映像として注視されていた。

したがって、エディは現地のオペレーターであるギニーと音声連絡を取りながら、必要な情報交換をし、必要な指示をすればいいわけだ。事前の説明によると、今回の任務はちょろいもの。ところが、救出現場に到着する前に、3 人の救出部隊は予期せぬ敵の攻撃を受けて、壊滅寸前状態に。ギニーも孤立してしまったから、彼にとっては、高性能センサー（カメラ）で状況を把握するエディからの音声による指示だけが唯一の希望に！

■□■なるほどこれがハイテク戦！まるで TV ゲーム！？■□■

今ドキの子供たちはスマホも得意だし、TV ゲームも得意。しかし、御年 76 歳の私には TV ゲームは全く無縁だ。しかるに、離婚歴においても軍隊歴においてもかなりの“偏屈者”らしい本作の主人公エディは、MQ-9 リーパーの操縦官としてかなり優秀な能力を持っているらしいからビックリ。しかも、今ドキの若者は勤務時間にうるさいから、MQ-9 リーパーの操縦官としてスクリーンの前に座っても「残業はお断り！」の風潮が強いところ、エディは正反対で、一度任務に就いたら残業も辞せず、何時間でもスクリーンを見つめ続

け、MQ-9 リーパーにミサイル発射等の重要な指示を与え続ける“強者”らしい。

そんなエディが重大な決定を下すために必要な情報を音声で伝えるのは、現地のオペレーターたるキニー軍曹の仕事だ。また、キニー軍曹の姿を常時センサーで捉えるのは、エディの隣に座るセンサー員（女性）の仕事だ。

1941 年 12/8 の未明、日本海軍は主力空母 6 隻から約 350 機の雷撃機、爆撃機、戦闘機を順次発艦させて真珠湾攻撃を敢行したが、その準備や攻撃体制の構築は大変な作業だった。それに対して、本作に見るミサイル発射は MQ リーパーの操縦官がスイッチを押すだけだ。センサー（カメラ）で現場を確認し、位置情報を入力してミサイル発射のスイッチを押せば、「何秒後に到着」と表示されるだけだから、作業自体は極めて簡単！しかし、ミサイル発射のスイッチを押すまでの操縦官の葛藤は・・・？

■■15 分毎に 3 発のミサイル発射を！その間の脱出は？■■

大量の敵に襲われて離れ離れになってしまったデルタフォース隊員たちが、しぶとく生き延び、人質になっていた CIA エージェントを収容しているゲリラの秘密基地に向かって行ったのはさすが。また、彼らと合流したキニー軍曹が、自らの位置情報を的確にエディに伝えたのもさすがだ。

そこでデルタ隊員たちが立てた作戦は、15 分おきに MQ-9 リーパーから秘密基地に向けてミサイルを発射させ、それによって基地内が混乱している間に人質を連れて逃走するというものだが、そんなリスクなことが本当に実現できるの？もちろん誰でもそう思うところだが、映画はそれをいかにスリリングな展開で成功させるかがポイントだ。

もちろん結果は成功とされているはずだから、それを頭に置きつつ、①デルタフォースの 3 人の戦闘員、②統合末端攻撃統制官のキニー軍曹、③MQ-9 リーパー操縦官のエディという三者三様の戦いぶり（ヒーローぶり）をしっかりと楽しみたい。もっとも、これはあくまで映画のこと。実戦ではなかなかこうはいかないことを、米軍は再三体験したため、その反省の上に現在のトランプ政権があり、「アメリカ・ファースト」があることをお忘れないように。

2025（令和 7）年 8 月 13 日記